

# \注釈 の使い方マニュアル

└─引出線を引っ張って注釈を表示する命令

## 基本的な使い方

- \注釈{語句}{注釈の内容} とすると、下線が引かれて、引出線の先に注釈が書かれます。
- 本文中でも数式中でも使えます。縦書き文書中でも使えます。
- 「注釈の内容」の部分複数行にしたい場合は、\\ によって強制改行を入れてください。
- 引出線を何段目まで深く引き出すかは、注釈内容が衝突しないように、内容の幅から自動的に判断されます。
- 「自動判定」を正しく反映させるためには、2回コンパイルが必要です。1回目のコンパイルでは、「自動判定」の注釈は全部「1段目」と見なして組版されます。
- 自動判定結果が気に食わないときは、「何段目まで深く引き出すか」を手動指定できます。 \注釈 [段数]{語句}{注釈の内容} と、[ ] オプションを付ければ、引き出す段数を手動指定できます。「1段目」が一番浅い段です。段数は「2段目」「3段目」のような整数のみならず、「3.5段目」のような小数指定もできます。
- \注釈 の代わりに \注釈\* を使えば、引出線を右ではなく左に引き出せます。(ただしこの場合は引出段数の自動判定結果は当てにならないので、引出段数は手動指定することになるでしょう。)

## パラメータのカスタマイズ

\注釈設定 というコマンドで、次のようにパラメータをカスタマイズできます (下記はデフォルト値です)。

```
\注釈設定{  
  文字サイズ=\footnotesize,  
  太さ=.4pt,  
  引出線開始位置=1.5mm,  
  前半引出線の最小長=3mm,  
  前半引出線の増加単位=4mm,  
  後半引出線の長さ=1.5mm,  
  衝突判定距離=2em  
}
```

次のパラメータの意味は分かりやすいでしょう。

- 文字サイズ：注釈の文字サイズを規定する命令
- 太さ：下線および引出線の太さ
- 衝突判定距離：「注釈内容の衝突」と判定される接近距離です。同じ段の注釈同士の水平距離がこの値以下になると、衝突と判定して、自動的に引出段数を深くとります。

他のパラメータの意味は次の通りです。



- 引出線開始位置：図中の  $a$  の長さ
- 前半引出線の最小長：図中の  $b$  の長さ
- 後半引出線の長さ：図中の  $c$  の長さ

また、「前半引出線の増加単位」というのは、下図の中の「1段目」「2段目」「3段目」……同士の縦間隔を指します。

